

英語科 提案授業実践報告

1. 学年と単元・題材 2年 Every Drop Counts (New Crown English Series 2 三省堂)

2. 単元・題材について

There is (are) ～. は英語教材の中では、部屋の見取り図や地図等の場所を表す題材とともに導入されることが多く、カリキュラム上は単元と単元の間に簡便に学習する位置づけになっていることもある学習事項である。そんな There is (are) ～. を、今年度から使っている教科書 New Crown では、1 単元（1 つの lesson）で学習するメイン事項の 1 つとして取り上げている。今回、そのことに機を得て、生徒がより探求的・主体的に There is (are) ～. を学べる工夫を取り入れた授業を計画した。

本単元では、There is (are) ～. と並んで動名詞も学習事項に入っているが、動名詞が、動詞の名詞化～すること」という日本語でも馴染みのある意味を持ち使い方をするゆえに日本語話者にとっては比較的容易な学習事項であるのに対して、There is (are) ～. は、意味のとらえ方や使い方においてやや難しい事項である。また、動名詞は英語の発話や文章の至るところに出てくるため学習の材料に事欠かないが、There is (are) ～. は教科書だけでなく書籍等の文章でも、頻度がやや下がるため、その手助けとなる授業を今回計画した。

また、授業をしたクラスが、4 名の英語圏帰国生と 2 名の小学校時の英語圏帰国生に加えて、学年の中でも非常に英語を嫌って学力も追いつかない 1 名の生徒を含むクラスであったため、研究テーマや授業の目的とは関係なく、その両極の生徒にも満足してもらえる楽しい授業を作ることを意識した。

なお、1 回の授業だけでは、生徒の自由な思考・判断・表現において There is (are) ～. をどれだけ然に使えるようになっているかを見取ることはできないので、9 月以降の授業の様子を付け加えて提案する。

3. 単元の目標／評価規準

(1) 本単元の目標

本単元の目標は、① There is (are) ～. / Is there ～? の使い方の理解と習得、②動名詞～ ing の使い方の理解と習得、③それぞれを使った説明文の記事を読んで概要の把握、④イベントでの出し物の話し合い、即興での町紹介のスピーチ、となっている。関係する主な領域は、①②では Listening, Speaking, Reading, Writing、③では主として Reading、④ではやりとりを含む Speaking である。

(2) 本単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・ There is (are) ～. の使い方を理解し、使えるようになる。 ・ 動名詞～ ing の使い方を理解し、使えるようになる。 ・ 助動詞 must (not) ～の使い方を理解し、使えるようになる。	コミュニケーションを行う目的や、様々な場面・状況に応じて(本単元では説明文概要把握、ランダムトピでの 1 人トーク、話し合い活動)、Lesson 3 の新出事項に加えて、既習の語彙や学習事項を使って英語で表現できるようになる。	・ 聞く、話す、読む、書くの各領域において、左記の 2 観点の達成に向けて積極的に取り組む姿勢が見られる。 ・ 苦手な領域でもチャレンジしようとする。

4. 指導と評価の計画（単元・題材）

時間	ねらいと学習活動	評価の主な観点	振り返り
1	There is (are) ～. の使い方を学習する。	[知識・技能] の習得	豆テスト相互採点
2	場所を表す前置詞の一覧の整理とともに There is (are) ～. を使えるようになる。	[知識・技能] の定着	豆テスト相互採点
★ 3	There is (are) ～. の実際の場面での様々な使い方に触れ、表現の幅を広げる。【指導案 1】	[知識・技能] の定着から [思考・判断・表現] への橋渡し [主体的な取り組み]	ワークシート（自作品）での振り返り
4	動名詞～ ing の使い方を学習する。	[知識・技能] の習得	豆テスト相互採点
5 6 7	不定詞の名詞的用法との違いも学びながら、動名詞を使えるようになる。 ----- [Lesson 1 関係で特別授業] 手持ちの洋書（英語の本）について、内容詳細以外のことをランダムペアで説明する。	[知識・技能] の定着 [思考・判断・表現] [主体的な取り組み]	豆テスト相互採点 相互評価（口頭）
	夏休み明け「大(お)豆テスト」(Lesson1, 2) ---語彙、ディクテーション、読解ライティング	[知識・技能] の定着 [思考・判断・表現]	教師採点によるフィードバック
8 ★ 9	ランダムなテーマで即興で何かを紹介するトーク練習（教科書ではサイコロを使ったペアワーク） 【指導案 2】	[思考・判断・表現] [主体的な取り組み]	ワークシート（自作品の記録）の自己分析に対する振り返り
10 11	There is (are) ～. や動名詞～ ing が使われている説明文 "Warka Water Project" の概要把握。	[思考・判断・表現] [主体的な取り組み]	
12 13	出し物等についての話し合いを、司会なども決めて即興で行う（教科書ではグループワーク）		
14 15 16	助動詞 must (not) の使い方を学習し、色々な場面で must (not) を使ってみる。（教科書ではペアワーク）	[知識・技能][思考・判断・表現] [主体的な取り組み]	
	中間考査(Lesson3) (短縮30分)の振り返り	「知識・技能」「思考・判断・表現」	

注）・教師採点による小テストは、授業時間外に朝礼の時間を使って週 1 回実施している（2 年生は国社数理英）。

・本校の定期考査は学期末の年 3 回。中間考査は 2 学期のみで、1 ～ 2 年生は英語のみ(30分)実施、3 年生は 5 教科(各30分)。

5. 本時の学習

（1）本時の目標

【第 3 時】・ There is (are) ～. の事例に広く触れることで、使い方を深く理解する。

・今後の自分の英語表現で There is (are) ～. を使えることを目指す。

【第 9 時】・身近なテーマについて即興で短い話をする。

・場所についての説明をする際に、既習の There is (are) ～. も自然に使えるようになる。

(2) 指導と評価の流れ

[第3時]

時間	ねらいと学習内容	指導上の工夫／振り返り・評価
課題設定	* Bingo の歌 "There was a farmert・・・" で前時の復習。 → There is ～. は「聞き手がまだ知らないものに注意を向けさせる表現。一般的に the ○○などには使わない」	[振り返り] ・教科書 p.50 の説明参照
課題追究	1. 機械(AI)翻訳だとどうなるか。 *Google translation *DeepL translation →「～が～にあります(います)」の変換のされ方に注目。 2. 漫画「ドラえもん」の中の There is (are)～. →日本語のどういう表現に英語の There is (are)～.が対応しているか。「聞き手がまだ知らないものに注意を向けさせる表現」として使われているか。 3. 有名な英語クイズ "There are five girls in a room・・・" の紹介でウォームアップ。 4. アメリカ小学校の数学教科書より (1) 英語で書かれた「数学教科書」を見てみよう。 ex) There were 11 rides at the fair. Sam did not ride 4 of them. How many did he ride? (2) 自分で簡単な数学(算数)の問題を作ってみよう。 (3) 周囲の生徒に出題して答えられるかどうか試そう。	・ AI = artificial intelligence ・ 翻訳サイトの使い方と注意 ・ 本日のみ Google Classroom に漫画の pdf をのせる。すぐ削除。 ・ 対訳付きだが未習文法のみ教師が解説。他は生徒に解説してもらう。 ・ クイズ作成意欲を刺激して、次の課題の取り組み意欲につなげる ・ 事例を見せたあとに教師が試作。 ・ なるべく簡単な問題を作らせる。 ・ 英和／和英辞典も使用可。 ・ 時間があれば発表してもらう。 [教師による一言評価]
省察	(1) There is (are)～の様々な使い方を理解できたか。 (2) 今後は自分で多少使えるようになりそうか。	・ この振り返り自体を 9 月以降の授業で振り返る。[生徒による自己評価]

[第9時]

時間	ねらいと学習内容	指導上の工夫、配慮、評価
課題設定	・ 場所を紹介するという目的、ランダムに与えられたトピック、という条件で即興で短い話をすることを説明。 ・ 事前練習として What did you do yesterday? / What do you want to do now? に対する答えを即興で 4 文で話す練習。	即興での話は、ハードルが高くなるので、授業はスモールステップで組み立てる。
課題追究	・ 以下の(A)～(C)3つのトピック群を用意。生徒はそれぞれ何について話すつもりか決めておく。 ・ 教師とのじゃんけん(勝ち・あいこ・負け)で(A)～(C)のトピックを割り当て、各上下のうち生徒がやりやすい方選ぶ。 A) a place to recommend in Ochachu a place to recommend on my way home B) a place to recommend in my town a place to recommend in Tokyo / Saitama / Chiba C) a place to recommend in Japan a place to recommend in the world ・ くじを引く前に教師作成のサンプル文を提示。	* コロナ第5波のため、教科書の「グループで」「サイコロを振って」ということが出来ないゆえの臨時措置

	・[第1ラウンド] Google document に音声入力機能で各自発話を記録する（誤認識されてもそのままに）。 [第2ラウンド] やり直し可。同じ文を再度録音し直す。 [第3ラウンド] さらにやり直しをしたい人は可。	・初めに日付を音声入力。 ・キーボードで使ってよいのはエンターキーのみ。トークが終わったら改行。
	・自分のトークの過程を振り返って自分なりに分析。その語りを音声入力する（対応言語を日本語に切り替える）。	"何人かに発表してもらうことを予め伝える。[教師による一言評価]"
省察	1. (1) 身近なテーマについて即興で短い話が出来たか。 (2) 既習の There is (are)～. も自然に使えたか。 2. 音声入力機能を使った即興でのひとり語りの学習効果について自由記述。	・前回との比較も含める。 [生徒の自己評価] ・生徒から教師への評価

6. 生徒の学習の実際

[第3時]

- ・全体的に、生徒の興味をひく事例を数多く用意したことで、飽きずに学習に取り組んでいた。
- ・インターネット翻訳ツールは、ほぼ全員の生徒が「使ったことがある、使っている」という状況で、予想以上だった。多くは Google 翻訳を使っているようだったが、どうせ使うなら高精度のツールの方がよいと思い、大学生の間でここ数年大変よく使われているらしい DeepL を紹介した。「～に～があります」という定型文も、AI が「～」部分を固有名詞と判断すると "There is Mr. Brown in this room." ではなく、"Mr. Brown is in this room." に変換されていく例が、生徒にも授業者にも面白かった。
- ・「ドラえもん」の中の There is (are)～. はすべて登場人物の会話の中に出てきている例だったが、非常に多様な使われ方をしているという程度には、生徒もすぐに理解できたようである。
- ・有名な英語クイズの紹介は、次の学習につなげる意図もあってこの位置に入れたが、クイズ自体が頭の体操的なものだったので、（この答えを知ったときの授業者同様）新鮮だったようである。
- ・数学の問題作りは、生徒は全般的に楽しく取り組めたようである（その理由として考えられるものは次項で後述）。1つ前の時間に、My Ideal Room の簡単な図を書かせ、There is (are)～. を使ったペア練習をさせたが、授業者の感触としては、その活動よりもはるかに取り組み状況がよかった。しかし生徒の一部には、サンプル文をまねしただけで創意工夫なく作っていた生徒もいたようである。

[第9時]

- ・この授業は、特に教科書の該当ページ（There is (are) ～. が使われている例が載っている）には触れずに実施したが、教師が示したテーマ一覧を見て「場所ばかりだ」と声を上げた生徒もいたくらいなので、There is (are) ～. が使えることに気づいた生徒もいたと思う。しかし実際、トークを始めると生徒は自分の話しやすい表現を使っていた。There is (are)～. の出現の度合いについては、公開研究会当日にお示しする予定である。
- ・コロナ第5波の状況下で、顔をつきあわせてのグループトークが出来ず、やむを得ず個別に即興語りをする形式に切り替えたが、生徒が Google Document の使い方を覚えたり、音声入力の機械の反応を実感したりといった、授業以前の準備に思いのほか時間がかかった。
- ・人に聞かれる緊張がない分、生徒はマイクに向かって気楽に語りかけているようだった。しかし、グループトークの場合は、多少発音が悪くても聞き手に理解してもらえるが、機械相手だとそれが許されず、そのことで悪戦苦闘している生徒が多く見られた。

- ・トーク内容を共有するために、3～4名の生徒に前に出てもらって、音声入力されている document をプロジェクター投影して解説してもらった。「こう言いたかったのに、こんな単語にされてしまった」という説明にやや時間をとられた（これはこれで爆笑を伴う楽しい時間となった）が、教師の添削や評価を全員で共有することができた。

7. 生徒の学習の考察

【第3時】

- ・インターネット上の翻訳サイトはおそらく使う生徒もいるだろうから触れておく必要があると考えて授業で紹介したが、4クラスともほぼ全員が使用経験があるか日頃からよく使うと知って驚いた。それゆえ、今後はアルファベットのキーボード操作と同様、機械翻訳については使用方法を正しく教えておく必要があると今回意識を新たにした。
- ・本時の「Math Quiz 作り」の方が、前時の「My Ideal Room 紹介」よりも取り組み状況が良かった理由については、即興で作るものについては、作品の単なる相互紹介よりも、自分が出題者側に回る（相手に答えさせる）活動の方が生徒は楽しめるということがあるのではないかと考えている。
- ・「Math Quiz 作り」を生徒が全体的に楽しく意欲的に取り組めた理由としては、次のようなことが考えられる。理由①：小学校低学年の算数レベルであることと、いくつか事例を示したことで、英語が苦手な生徒もパターンをまねすれば作成できた。理由②：数学的に凝ったものを作りたい生徒（＝英語に関心がないことが多い）が創意工夫の力を発揮する場となった。③パターンに飽き足らず独自の表現を組み込もうとする生徒（＝英語が得意な生徒）は、様々な既知既習表現を使える場となった。

【第9時】

- ・通常の“即興グループトーク”では最初に話す生徒と最後に話す生徒では、数分のタイムラグが生じる。最初の生徒は考える間もなく話し始めなければならない、最後の生徒は考える時間があったり、他の人の発表からヒントをもらえたりする。そこで今回の個別トークでは、初めに **thinking time** を1分間とり、かつ「自分が30秒以内で楽に話せる内容で」という条件を付けたところ、口が止まっている生徒はいかなったので、英語が得意なら得意なりに、苦手なら苦手なりに、失敗を気にせずにはトライできるのが個別学習の良さであろう。学校での協働学習の有効性は様々な場面で実証済みだが、たまにはこういった、人の発表に左右されず、背伸びをせずに話せる環境を作るのも、それなりの効果があると感じた。
- ・トーク練習は音声が消えてなくなるため、記録しておくためには録音するか筆記するしかないが、録音は再生に同じだけの時間がかかるというデメリットがあり、筆記は、文字化することが苦手な生徒にはハードルが高くなる。また、何かにつけて書いて残そうとする生徒は、話すことに集中できなかつたりする。そう考えると、この音声入力機能は話すことだけに集中でき、かつ記録も残るので大変便利である。ただし、日本人の英語の発音を寛大にキャッチしてくれないのが難点である。
- ・授業の最後15～20分で、数名のトークを全員で共有する時間をとったが、この共有の時間がないと授業の効果が半減すると感じた。また、通常のトーク練習では教師がひとりひとりのエラーチェックをすることは出来ないが、音声入力ではデータが残るので、学年全員分を集めて添削することも可能である。

8. 成果と課題

【第3時】

本授業は、There is (are)～. の事例に広く触れることで使い方を深く理解することと、今後の自分の

英語表現で There is (are) ～. を使えることを目的としているが、これらが達成されていると生徒が考えているかどうかについては、授業後のアンケートによる生徒の自己評価に依ることとした。

「There is (are) ～. の様々な使い方を理解できたか」については、「とても理解できた (52%)、わりと理解できた (43 %)、あまり理解できなかった (4%)、全く理解できなかった (0%)」という結果だったので、目的に対しておおむね効果のある授業だったと考えている。

「今後は自分で多少は使えるようになりそうか」については、「とても思う (43%)、わりと思う (43%)、あまり思わない (9%)、全く思わない (4%)」という、当日の授業の理解度と連動したような結果になっているが、これはあくまで授業直後の生徒の予想に過ぎないので、9月以降の授業で、どれだけ定着し、どれだけ自在に使えるようになっているかを見ていきたい。

課題としては、第3時の本実践が単なる「知識・技能」の習得なのか、「思考・判断・表現」の要素も含むかが授業者自身も曖昧であることがある。前者としては十分目的を達成できた授業だったので、9月には敢えて There is (are) ～. の使用を誘導しない授業で様子を見たい。

[第9時]

本授業の当初の目的は「身近なテーマについて即興で短い話をするができる」「既習の There is (are) ～. を自然に使えることができる」という2点だったので、まずはそれらについての振り返りをしてもらった。第3時での振り返りは用紙を集めて集計したが、第9時では Google Form で行った。質問項目と回答は以下の通りである。

「1分程度の thinking time で考えをまとめることについて」 ---- とてもできた (10.3 %)、わりとできた (56.4 %)、あまりできなかった (23.1 %)、全くできなかった (10.3 %) ■ 「(音声入力)の成否は別として」 約 30 秒で英語で話をするについて ---- とてもできた (17.9 %)、わりとできた (41 %)、あまりできなかった (30.8 %)、全くできなかった (10.3 %) ■ 「トークのトピックは場所についてでした。There is (are) ～. の使用についてお聞きます。」 ---- There is (are) ～. を使ってみた。(35.9 %)、There is (are) ～. は敢えて使わないで表現した、あるいは特に使う必要がなかった。(33.3 %)、There is (are) ～. を使うことを思いつかなかった。(20.5 %)、その他 (使ったが使い方が適切でなかった、別の表現を使った、等 計 10.3 %)

以上を見ると、場所を表す表現をする際には、約 1/3 の生徒が There is (are) ～. を自然に使っていることが分かった。夏休みをはさんで約 50 日後の定着度としてはまずまずなのかも知れない。

また、コロナ第五波対策により、計らずも「音声入力機能を使った即興トーク」を企画することになってしまったため、それに関する振り返りもしてもらった。 ---- 音声入力機能を使った「即興トーク (ひとり語り)」の学習方法について、あなたが思いつく長所・短所があれば書いてください。「機械の不調でできない時がある。/ 恥ずかしくない。/ 書いているとスペルミスや文法のおかしさに気づけるけれど、喋っているとわからなかった。/ 音声入力のいいところだと思った。/ 自分の発音を考えることができる (客観的に見て自分の発音が良いのかを知ることができる) / 他の人との接触がなく、話さずにできる/ 考える練習になるが実際に先生や友達と話したほうが、アドバイスしあえるので勉強になるのではと思う。/ もっと良い音声入力アプリを使えばいいと思う (これはダメ) / 機械が読み込んでくれるので自分の現段階でのレベルを知ることができる。学習の記録を残しておくことができるので、上達の様子を目に見ることができる。/ 他を人の力を借りずに、好きなときに好きなだけできるのが長所だが、この問いにはもっとこうしたら良いなどのアドバイスが貰えないのでそこが短所。/ それぞれの実力に合わせて量の練習ができる。

日本人の発音する英語にもう少し寛容なソフトができると効率良く使えるかも知れない。また、協働学習と個別学習のそれぞれの長所短所に生徒が気付いているところが興味深いと思った。